

KCELS

Newsletter No.8
MARCH 1993

第17回 KCELS 大会を終えて

別府 恵子

「時(間)は流れない、それは積み重なる。」といっても、ショーン・コネリーがグラスを片手に演じるコマ・シャルのコピーの話ではない。KCELS(神戸女学院大学英文学会)が発足して、今年で17年の時が流れたことになるのだが、その歳月は決してどこか手のとどかない彼方に流れ去ったのではなく、色々なところで、いろいろな形で蓄積されているのだと思う。

今年度のKCELS大会は、キャンパスの銀杏の木の黄葉が美しい11月15日、特別講演に遠来の講師を迎えて、盛大に開催された。講師のダレスキー博士はその名を世界に知られた、D.H.ロレンスの研究者。堂々とした体格のダレスキー氏は、19世紀から20世紀にわたる英国小説

の「流れ」の継続性を、ハーディ、コンラッド、ジョイス、ロレンスの個々の作品や作風を傍証に、熱っぽく訴えられた。

また、例年のごとく、今大会でも二人の卒業生による研究発表が行われたが、在学生たちの年齢に近い先輩たちの研究活動を知ることは、大会に参加した学生たちに、目標とすべき選択のある可能性を考える機会となったのではなかろうか。さらに、17年間蓄積してきた「時」を再投資し、KCELSの活動をより盛んにするためにも、これまで教師や一部卒業生たちだけで企画、運営してきたKCELS大会の運営に、在学生が積極的に参加してもよいのではないだろうか。本学英文学科の学問的核となる英文学会(KCELS)、そして教師、学生、卒業生の交流の場となってほしいKCELS年次大会は、単に「時」が通過するだけの場ではないのだから。



Foreshadowings and Echoes : Hardy as a Precursor of Conrad, Joyce, and Lawrence

In this talk I set out to trace Hardy's relation to prominent modernists such as Conrad, Joyce, and Lawrence

H.M. Daleski

Professor of English Literature,
Hebrew University at Jerusalem

from two different points of view. First, I seek to show that Hardy, despite his apparent Victorian orientation, in

his handling of certain narrative techniques anticipates the work of these modernists. Hardy believed that the novel should be viewed as “an exemplification of the art of storytelling,” and he accepted as fundamental that the story should be organized by means of plot in a tight mechanism of cause and effect. The modernists were utterly opposed to such a view of the novel, reducing the element of story to a minimum and discarding the use of plot as an organizing principle. Nevertheless Hardy foreshadows their work in respect of three major techniques. One of Conrad’s major techniques may be described as literary impressionism. Hardy is on record as being aware how the ideas of impressionist painters could be exploited for literature, and in a detailed analysis of two passages from *Tess of the d’Urbervilles* I show how he employs this technique well before Conrad. A modernist technique particularly associated with the work of James Joyce is the use of epiphany as a descriptive mechanism. In an analysis of a passage from *Jude the Obscure*, I suggest that this is as fine an example of the technique as any in Joyce. Finally, I discuss Hardy’s method of characterization. Initially he worked within a Victorian frame of characterization, accepting the need for the development of character and for its portrayal in terms of consistency. Towards the end of his career as a novelist, however, he came to believe that “persons are successively various persons, according as each special strand in their characters is brought uppermost by circumstances.” This view is very close to that of Lawrence, who thought of characters as passing through “allotropic states.” It also implies a complete rejection of the Victorian notion of consistency, a rejection that is concretized in Hardy’s portrayal of Sue Bridehead in *Jude the Obscure*.

In the second half of the talk, I concentrate on Hardy’s relation to Lawrence, but, changing the perspective, consider how Lawrence’s work echoes that of Hardy, not in terms of technique but of image and scene. Before Lawrence began his final revision of *The Rainbow*, he read Hardy intensively in preparation for his “Study of Thomas Hardy.” I claim that both *The Rainbow* and *Woman in Love* time and again echo Hardy’s novels. In certain cases the echoing may be deliberate, but in others it may be unconscious or inadvertent. What is undeniable, I argue, is the repeated fact of the parallelism. I set out to establish the parallelism in specific instances by

means of detailed analyses of paired passages from *The Rainbow* and *Far from the Madding Crowd*; *The Rainbow* and *Jude the Obscure*; *The Rainbow* and *The Return of the Native*; *The Rainbow* and *Desperate Remedies* together with *Far from the Madding Crowd*. I then turn to *Women in Love* and conclude with analyses of passages from that novel and *The Mayor of Casterbridge* and *Tess of the d’Urbervilles*.

■研究発表(要旨)■

Want型動詞のとりNP to VP補文について

石原由貴

Want, desire, prefer等がとるNP to VP補文は、例外的格付与補文とは異なった統語的特性を持つことが知られている。例えば、want型動詞の場合、believe型動詞とは違って、①補文標識forが生起可能であり、②補文の主語の受身化ができず、③再帰代名詞が補文の主語になれない。

- (1) I want very much for John to win
- (2) * John is wanted to win
- (3) ? Alice wants herself to learn karate

(Bresnan 1972: 162)

そこで、Bresnan(1972)らの考察を取り入れ、want型動詞は、forに対応し音形を持たない補文標識 δ を主要部とするCPを選択すると仮定する。 δ はfor同様、適正主要部統率子となることができないので、②③の特性は、空範疇原理から導くことができる。なお、補文の主語のwh取り出しが可能であることについて、Rizzi(1990)の主語の取り出しのメカニズムを不定節にも適用して、は指定部主要部一致によって適正統率子となりうることを、説明する。

次に、forと δ の分布は、格理論によって規制されるとみるのが自然であるが、want型動詞の直後の名詞句、すなわち δ の直後の名詞句は、どのように格フィルターを通過することができるのかという問題が残る。そこで、格付与の際には、格付与子と同じ格指標が名詞句に与えられると考え、格フィルターは、格付与子と被格付与子と同じ格指標を共有していない場合を排除するというように、格理論を再定式化する。さらに、want型動詞に隣接し、それに統率される δ は、格を伝達(transmit)することができるという有標の性質を持つと仮定すれば、格付与子であるwant型動詞と補文の主語の名詞句と同じ格指標を持つこととなり、動詞と名詞句との間に統

率関係がなくても want の NP to VP が格フィルターを通過することが説明できる。

従って、want 型動詞の補文の特性は、その下位範疇化素性に局所化することができる。

Dombey—Edith—Carker 世界と Midshipman 世界

—Dickens の転換期の作品として読む *Dombey and Son*—

小 寺 里 砂

Dombey and Son という小説空間には、二つの相反する世界が並置されている。その一つは、Dombey、Edith、Carker という三人の人物が絡んで形成する Dombey—Edith—Carker 世界であり、もう一つは、“Wooden Midshipman” の人形が戸口に立っている Solomon Gills の船舶道具店を陣営としてそこに集う人間たちが形成する Midshipman 世界である。この小説の主題である “Dombey and Daughter” の展開は、Dombey—Edith—Carker 世界と Midshipman 世界との間における力関係の移行と軸を一にする。すなわち、Dombey の娘でありこの小説のヒロインである Florence の Dombey—Edith—Carker 世界から Midshipman 世界への脱出と、Dombey 本人の Midshipman 世界への同化をもって、“Dombey and Daughter” のテーマは成就されるのである。ところが、このように Midshipman 世界は Dombey—Edith—Carker 世界に対して全面的勝利を納めているにもかかわらず、その Midshipman 世界の支配力に対して読者は信頼が持てない。その原因は、ヒロイン Florence を片隅に追いやってしまうような Dombey—Edith—Carker 世界が孕んでいた幾つかの特質要素にある。Dombey—Edith—Carker 世界の崩壊に際して Midshipman 世界はその要素を回収せねばならなかったにもかかわらず、それをしていない、いや、することができないのである。今回の発表では、その言わば消化不良となっている要素の内容を見極め、消化不良の原因を探ることを目的とした。そこに、我々は、この小説の数年後に繰り広げられていく Dickens の後期作品群への足掛かりを掴むことができるからである。

キャンパスニュース

◎英文学科新任教員紹介

- ・灘波江和英助教授 (関西学院大学大学院博士課程修了) 1992年4月より就任されました。
20世紀イギリス小説、文芸批評 (とくに現代思想) を研究されています。

- ・和気節子研究助手 (神戸女学院大学大学院博士課程修了)
本学大学院後期博士課程の第一期修了生で、1992年4月より、1、2年生の英語科目を担当されています。

会 員 消 息

- ・A. Banerjee 氏 (本学教授) アメリカ、ニューヨークで開催された The First International F. Scott Fitzgerald Conference (1992年9月) にて研究発表。
- ・風呂本惇子氏 (本学教授) アメリカ、シアトルで開催された The 35th Annual African Studies Association (1992年11月) にて研究発表。
- ・泥谷征人氏 (本学教授) イギリス、エジンバラで開催されたカーライル協会3月例会 (1992年3月) にて研究発表。
- ・B. L. Cooney 氏 (本学専任講師) 本学よりイギリス、Bradford University に1992年9月から一年間留学。
- ・泥谷征人氏 (本学教授) 1年間の英国留学を終え、1992年9月帰任。
- ・吉村京子氏 1992年4月より、大阪学院短期大学に専任講師として就任。

会員による新出版ご紹介

- ・別府意子氏
『川のアメリカ文学』(岩山・別府編)
1992年7月 南雲堂
『子どものイメージ——19世紀英米文学に見る子どもたち』(松村昌家編) 1992年10月 英宝社
- ・風呂本惇子氏
『川のアメリカ文学』(岩山・別府編)
1992年7月 南雲堂
『アニー・ジョン』(ジャメイカ・キンケイド著)
1993年1月 学芸書林 翻訳書
- ・林 和仁氏
『イギリス文学評論』(内多毅監修) 1992年4月 創元社
- ・本城智子氏
『現代英文法辞典』(安井稔・荒木一雄監修) 1992年7月 三省堂
- ・上 紀子氏
『現代英文法辞典』(安井稔・荒木一雄監修) 1992年7月 三省堂

会 則

(1) 名 称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目 的

本学は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発展と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構 成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 会 費

正会員は年会費を納入する。

(5) 活 動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletter を発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

お 知 ら せ

これまで会員の皆様には通信費等に当てるため、年会費1,000円の納入をお願い致しておりましたが、会費徴収については現在検討中です。今回お送り致しました振込用紙は暫くお手元にお届けおき下さい。既にお振り込み載いた方は、預かり金とさせていただきます。



KCELS Newsletter 編集委員

(第17回 KCELS 大会準備委員)

・ A. Banerjee ・ 平井雅子 ・ 伊藤栄子 ・ 溝口 薫
(A B C 順)

KCELS 正会員募集
詳細は英文学科まで

KCELS Newsletter No. 8

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山 4-1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323